野菜栽培一覧（道内向）

葉茎菜類の部

種類	作型	播種期	反当3要素量(kg)	栽培距離(cm)	反当播種量(l)	収穫期	栽培の要点
ほうれんそう	春作	4末～5下	チ 15 リ 7.5 カ 11	幅 40～60 間 10～17	7～9	6上～7中	酸性土壌に弱いから酸性のところでは石灰類を土にまぜて中和し，堆肥をたくさん施すとよい。夏作にはキングオブデンマークやバイキングを，秋作にはミンスターランドや日本種が適する。越年作にはミンスターランドが良いが，伊達町のような風土のところでは（道南地方）「伊達種」を使うと成績が良い。越年作の場合には特に排水のよいところを選ぶことが大切である。 ハモグリバエに対してはＢＨＣ乳剤を10日おきに散布するとよい。
	夏作	6中～7上				7下～9中	
	秋作	8中下				9下～10下	
	越年作	8下～9初				4末～5下	
ふだんそう		4下～6下	同上	幅 45～60 間 30～45	2	7上～9下	葉の長さ20㌢位になったころから，外葉をかき取って食用にする，夏の青物として自家用によい。ときどき硫安を追肥すると秋まで軟かい葉が食べられる。ビートと同類であるから前種同様酸性土壌に弱い。青茎，白茎があり，夏菜ともいう。
つるな		4下～6下	同上	幅 60 間 30～45	2.5	7上～9下	つるになって地をはい，ほうれんそうのような葉が茂る。この葉をつみ取って，ほうれんそうのようにして食す。夏の青物として自家用によい。
漬菜類	春作	4下～5上	同上	幅 45～60 間 10～25	0.9	5下～7中	生育するにしたがい間引いて食用に供し，最後に予定の株間にする。春まきの場合体菜，小松菜は抽薹するが，四月菜は抽薹しにくいので，肥切れせぬようにときどき追肥すれば収穫期間を長引かすことができる。
	秋作	8中下		幅 45～60 間 15～35		9下～10下	
非結球白菜	春作	4下～5上	同上	幅 60 間 25～30	0.9	5下～7上	体菜同様に抽薹する。山東菜，花心白菜などがある。
結球白菜	秋用	7中下	チ 19～22 リ 13～16 カ 15～18	幅 60～75 間 60	5.5デシ 55ミリ（ねり床）	10上～10下	病害が多いから必ず3，4年の輪作を行なう。十字花植物のネコブ病の発生するところでは絶対に十字花そ菜を輪作の中に組入れてはいけない。ネコブ病発生の恐れあるところでは必ずＰＣＮＢ剤を土にまぶして作付する。結球期に腐敗病の多発するところでは，播種期をややおくらせると発生が少なくなる。本病は根部のダイコンウジなどの傷口から菌が侵入するので作条にアルドリンかヘプタクロールを散粉し，さらに本葉がでてから葉面散布する。ねり床で育苗して定植（本葉4，5枚のとき）すると，畑の利用上もよく，球も揃って良いものが取れる。結球始めの時期に硫安の追肥を行なう。晩生種は天災により結球が不十分となる場合があるから栽培に気をつける。
越年菜	春用	8下～9初	チ 15 リ 7.5 カ 11	幅 45～60 間 12～20	0.9	4下～6中	播種期がおくれると冬枯れしやすくなるばかりでなく，翌春の収量も落ちるので注意を要する。融雪早々硫安を追肥し軽く中耕する。春先の青物が少ないから自家用としての栽培を望む。茎立菜，札幌菜，四月菜などがある。
かんらん（キャベツ）	早生	3上・中（温床） 5上（定植）	チ 17～20 リ 13～14 カ 14～16	幅 60 間 60	55ミリ 5.5デシ（直播）	6下～7中	温冷床で2回移植を行なう。中生種，晩生種では直播も行なうことあり，中，晩生種は結球始期に硫安の追肥を行なう。青虫やヨトウムシが発生するからＤＤＴやＢＨＣ粉剤および砒酸鉛液を初期から散布しておく。アブラムシが多発しそうなときは低毒性有機燐製剤で防除する。翌春まで畑で根をつけて溝貯蔵する場合は，球のシマリのややわらかいものがよい。
	中生	4末～5上（冷床） 6上・中（定植）	チ 20～23 リ 14～15 カ 17～20	幅 75 間 60		8下～9中	
	晩生		チ 24～26 リ 14～15 カ 17～22	幅 90 間 60～75		9中～10下	
はなやさい（ワーカリフラ）	早生	3上・中（温床） 5上（定植）	チ 17～20 リ 13～14 カ 14～16	幅 60 間 60	55ミリ	6中～7上	温床で2回移植を行なう。花蕾発生初期に外葉で包み，日光をさえぎり，花蕾の割れぬうちに収穫する。中，晩生を作ると秋まで取れる。ブロッコリー（木立花野菜）は自家用としても重宝なもので，今後は販売用としてものびるものと思われる。
コラビル		4上～7中（温冷床） 5上中～8上中（定植）	チ 17 リ 7.5 カ 7	幅 45 間 15	3.6デシ	播種後70～80日目	温冷床で1回移植を行なう。随時播種もできる。 球径6～8㌢のときが食用適期である。自家用としてよいものである。

種類	作型	播種期	反当3要素量(kg)	栽培距離(cm)	反当播種量(l)	収穫期	栽培の要点
ちしゃ	春まき 夏まき	4下～5上 7末～8上	チ 15～20 リ 9～12 カ 13～17	幅 30～50 間 13～20 幅 60～30 間 30	5デシ	6中～7上 9中～10中	25°C以上の温度に長くあうと抽薹する。ほとんどが生食されるので，必ず清浄栽培をする。ウェアヘッドなどのように結球せず青い葉の多い品種を，俗に「サラダ菜」といい，グレートレークのように結球する品種を，俗に「レタス」といわれている。
みつば		4下 6中・下（軟白用）	チ 9.5～15 リ 5～7.5 カ 6～11	幅 45 間 6 床に散播することあり	5.5	5上～6下	冬季促成するには10月下旬～11月上旬に根株を掘上げ，排水のよいところに伏せておき，ビニールハウスなどで随時軟白する。
パセリー		5上	チ 15 リ 7.5 カ 11	幅 45 間 12	5.5デシ	8下～11上	みつばのように根株を囲っておいて冬季に作成することができる。必ず清浄栽培をする。
セルリー		3上～4中（温床） 6中～7中（定植）	チ 20～26 リ 10～13 カ 15～20	幅 75～90 間 30あるいは2条植	20ミリ	9上～10下	温床で1回移植を行なう。堆肥を多く施すと良いものができる。追肥に硫安を3～4回施す。畑が乾燥すると生育が悪く，品質が落ちるので敷わらしたり，灌水したりする。温冷床の跡を利用するとよいものができる。白茎種は収穫の20日前に葉柄の部分を株ごと新聞紙で巻いて軟白する。青茎種(ユタ種など)は軟白しなくてよい。必ず清浄栽培する。根を付けて溝貯蔵すると長期間利用できる。
ねぎ	普通ねぎ やぐらねぎ	4下（温冷床） 7下～8中（定植） 7上～7下（定植）	チ 15～18.8 リ 9～11.3 カ 13～15	幅 82～90 間 6 幅 60～82 間 10～13	5.5デシ 18,000本～14,400 18,000球～13,500	5上～5下 7下～10下 5上～6下 8中～10下	温冷床で育苗して1年ねぎとして出荷するとよい。1年性ねぎは越冬が困難であるので，2年性ねぎを用いるとよい。加賀根深，札幌根深などがある。やぐらねぎは7月に「トウ」の上にできる小玉を種球として植込む。タマネギバエの被害のあるところは普通ねぎよりもやぐらねぎの方が作りやすい。ねぎぼうずは抽薹したら速かに除去して新芽の伸長を促すようにする。 タマネギバエの被害のあるところではBHC粉剤などを5月末から9月末まで，1週間ごとに散布して防除する。被害のはなはだしいところでは玉葱の防除に準ずればよい。
にら		4下 7下～8中（定植） 5上～7下（株分）	チ 18.8 リ 11.3 カ 15	幅 50 間 17～26	0.7～0.9 14,400株～9,000	5上～6下 （普通栽培）	促成，抑成栽培をするとよい。玉葱栽培地帯ではにらの株がタマネギバエの蛹の越冬場所となるから自家用のものでも，9月初にEPN乳剤を散布し，さらに2週間たって散布しておくと蛹になる幼虫を絶滅することができる。
アスパラガス		4下～5上 （翌春同時期に定植する）	チ 18.8 リ 13.3 カ 15	幅 {グリーン 120 / ホワイト 180} 間 30	（グリーン）0.9デシ 2,700株 （ホワイト）0.6デシ 1,800株	5中～7.15	酸性土壌地下水位の高いところ，重粘土地，地下の浅いところに固い盤のあるところは不適地，土壌に対する適応性が広い。 1年育苗し，翌春定植し，定植3年目から収穫する。収穫初年度は2～3週間，2年度は4～5週間，3年度6～7週間，4年度以降は8週間収穫する。収穫期間を長引かすと株が弱り，根腐病（現在適確な防除薬がない。）が発生するから特に注意を要する。 メリーワシントン系の品種がよい。自家用としてグリーンアスパラガス（培土をして軟白しない）の利用をすすめる。除草剤は春はクロロIPC，夏はカーメックスかシマジンを使うとよい。
うど		5下～6上（さし木） 4下～5上(翌春定植)	チ 18.8 リ 13.3 カ 15	幅 180 間 45	1,200株	5下	軟白した幼茎を6㌢の深さに埋めてさし木を行ない，苗を作って翌春定植する。

果菜類の部

種類	作型	播種期	反当3要素量(kg)	栽培距離(cm)	反当播種量(l)	収穫期	栽培の要点
トマト		4上（温床） 6上（定植）	チ 18～23 リ 13～15 カ 22～26	幅 75～100 間 45	0.2	8上～9下	温床で2回移植する。支柱を与え1本立とする。第5花房上4，5葉を残して摘心する。生育期間の短いところでは花房数（段数）を少なくする。窒素質肥料の過用は実の酸味を増し，うまみがなくなる中耕の際浅く培土する。尻腐病は石灰の吸収不良によって起るものであるから，石灰類を施しさらに畑が乾かないように，堆肥の多用，敷草，灌水によって被害を防ぐようにする。疫病防除のため7月上旬から数回薬剤散布を行なう。ウイルス病，トマトかいよう病（キャンカー）は発見次第抜取り処分する。
なんばん		4上（温床） 6上（定植）	同上	幅 60 間 30	0.4	7下～10上	温床で1回移植する。中耕の際浅く培土する。ピーマンは開花しても低温の場合は実が止まらないので，ビニールトンネルをかけて保温すると実の止まりがよくなる。
なす		4上（温床） 6上（定植）	同上	幅 90 間 45	0.2	7中～10上	温床で1回移植する。中耕の際浅く培土する。実をあまり大きくしないで順次収穫していくと総収量が多くなる。葉裏にハダニが発生しやすいものであるから早期に殺ダニ剤を散布して防除する。

種類	作型	播種期	反当3要素量(kg)	栽培距離(cm)	反当播種量(l)	収穫期	栽培の要点
なす							半身ちょうい病は発見次第抜取り処分する。畑の乾燥防止の方法（堆肥の多用，敷草，灌水）は収量を増す。
きうり	早まき	4下（温床） 6上（定植）	チ 18～23 リ 13～15 カ 22～26	幅 70～90 間 45	0.5	7上～8下	温床で2回移植する。支柱を与え，中耕の際浅く培土する。 畑の乾燥防止法は収量を増す。
	余まき	6下～7下（直播）	同上	幅 90 間 45	0.9	8下～9下	余まきの場合品種によっては支柱を立てることもある。なお余まきの場合は初期の花蕾は摘花して晩秋まで，草勢の維持をはかるとよい。「四葉」は余まきにもでき，自家用としてもよい品種である。
すいか		5上（温床） 6中（定植） ---------- 5下（直播）	チ 18～23 リ 13～15 カ 18～23	幅 180 間 180	0.2 ---------- 0.4(直播)	8中～9上	温床で1回移植する。移植のときは「ハチ」類に植え，定植のときの植えいたみを少なくする。直播した場合は紙テントなどを覆って保温する。元肥に窒素分が多過ぎるとツルボケとなり，着果が遅れる。早朝に人工交配する。1番成りは不正形となるから早期に摘果した方がよい。特にタンソ病，ツルワレ病，ツルガレ病の防除を完全にする。ツルワレ病はゆうがおとの接木によって防除することができる。
露地メロン		5上（温床） 6中（定植）	チ 18～23 リ 13～15 カ 18～23	幅 90 間 60	0.1	8中～9上	温床で1回移植する。「ハチ類」に移植して定植のときの植えいたみを少なくする。親蔓を2，3節で摘心し，子蔓1本を伸し15節で摘心し孫蔓は果実上2葉を残して摘心する。その後発生する蔓は1葉を残して摘心する。人工交配するとよい。果実が鶏卵大になったときに1蔓1箇に摘果する。最近優秀な1代雑種がでているので作るとよい。 特にタンソ病，ツルガレ病の防除を完全にする。
まくわうり		5下	同上	幅 90 間 60	0.9	8中～9上	親蔓を4節で摘心し，子蔓3本を伸し，各5節で摘心し，孫蔓は果実上2葉を残して摘心し，その後発生する蔓は1葉で摘心する。 特にタンソ病，ツルガレ病の防除を完全にする。
しろうり		6中・下	同上	幅 90 間 60	0.9	9上～9下	摘心法はまくわうりに準ずるが，普通は孫蔓の摘心は行なわれない。特にタンソ病，ツルガレ病の防除を完全にする。
かぼちゃ		5下	同上	幅 180 間 180	1.8	8中～9上	1くら2本立とする。早朝に人工交配をする。雑種のものから採種せず，品種の正しいものを人工交配して採種する。 特にタンソ病の防除を完全にする。
とうもろこし		5中～6中	チ 11 リ 11 カ 7.5	幅 75～90 間 30	4.5	8中～9下	1株1本立とし，草丈30㌢位のとき培土を行なう。 2，3回に播種時期をずらしてまくと，収穫期間を長引かすことができる。
さんどうさやえ		融雪直後～5上	チ 9.4 リ 7.5 カ 9.4	幅 60 間 15	5～8	6下～7下	1株2本立とし，草丈15㌢位のときに浅く培土を行ない，支柱を与える。
さんげいんいい		5中下旬	同上	幅 60～75 間 20～25	5～10	7下～9上	1株2本立とし，草丈15㌢位のときに浅く培土を行ない，手有の品種には支柱を与える。
えだまめ		5上～6下	同上	幅 45～60 間 18～30	7	7下～9上	1株2本立とし，草丈15㌢位のときに浅く培土を行なう。 早，中，晩の品種をまくことによって収穫期を延すことができる。
いちご		8下～9初	チ 15～19 リ 11～15 カ 15～19	幅 60～82 間 30	5,400株 ～4,500	6中～7上	養成した大きな苗を早目に定植する。9月10日以後に植えたものは翌年の収穫量が非常に少なくなるから定植時期を失しないようにする。早春に追肥（窒素と加里）をし，軽く土寄せをする。このとき心に土が入らないように注意する。収穫後に畦間に元肥を施す窒素質が多すぎると酸味が強くなるばかりでなく，実の腐れも多くなる。 花が散りだしたら敷わらをして実が泥などできたなくなるのを防ぐ，でてくるランナー（蔓）は全部除去する。3年収穫したら更新した方が得策である。必ず清浄栽培をする自家用として四季成りいちごもよいものである。 イチゴハナゾウ（チョッキリゾウムシ）に対しては，初め1，2輪開花したときから5日毎にDDT粉剤か，乳剤を蕾を対象として散布する。灰色カビ病にはマンネブダイセンを花群が結実する毎に散布する。芽線虫に対しては収穫打切り後に普及員の指導によりホリドールを散布する。